日露慣用表現に見る身体と精神の捉え方

Kekidze Tatiana　　田中聰子

キーワード：　日露対照、身体、精神、慣用表現、概念体系

0.　はじめに

0.1　本稿の目的と理論的背景

本稿は、身体と精神[1]の関係という視点からロシア語と日本語の慣用表現を比較し、それぞれの概念体系（ある言語共同体による世界の捉え方の総体）における身体と精神の概念を特徴づけようとする試みの一つである。たまたまある身体部位語を含む両言語の表現が辞書の上で対応するとしても、それぞれの言語共同体がその身体部位について抱く概念が必ずしも一致するわけではない。詳細に検討すればそこにかなりの違いが見出される。そしてその違いは両言語の背景をなす文化と無関係ではあり得ないと思われる。

本稿のテーマおよびアプローチ方法は、認知言語学の研究の結果として自然にたどりついたものである。認知言語学は、伝統的な言語観である客観主義的言語観への根本的な批判から生まれたものと言うことができる。客観主義的言語観とは、簡単に言えば、言語は現実世界の事象そのものを反映するという考え方である（詳しくはLakoff 1987参照）。これに対して認知言語学的言語観は、言語が反映するのは現実世界そのものではなく、言語使用者である我々が現実世界をどのような観点から理解し、どのようなやり方で思い描くかを反映するものであると考える。つまり言語は、事態ではなく事態についての概念を表す記号の体系であるということになる（詳しくはLangacker 1987参照）。

客観的には同じ事態、言い換えれば真理条件的に等しい事態を表す異なる表現を持つのが言語にとって通常であるという事実、そしてそうした表現が完全に同じ意味を伝えるものとは感じられないという事実は、客観主義的言語観では説明できないが、認知言語的な言語観によれば体系的に説明できる。たとえば、「上り坂」と「下り坂」や、「締め切りまであと三日しかない」と「締め切りまでまだ三日もある」、また「ＸがＹに似ている」と「ＹがＸに似ている」、「ＸがＹの前にある」と「ＹがＸの後ろにある」といった対になる表現の意味の違いは、同じ事態の捉え方の違いと考えてはじめて説明できる。

またある言語の語彙や慣用表現の意味には、その言語共同体成員に共通の期待や仮定、何らかの価値判断とその判断が暗示する価値基準といったものが組み込まれている。

例えばFillmore（1982）の例を引くなら、英語の‘bachelor’がキリスト教会の長である教皇に対して適切に使えないのは、社会的規範である適齢期の概念やそれに従がわない世俗の人間に対する価値判断といったものがこの語の意味に組み込まれているからである。言語に反映される共同体に受け継がれてきた概念体系とは、そうした共同体の成員に共通の期待や仮定、何らかの価値判断とその判断が暗示する価値基準といったものの総体であるということである。したがって意味の研究とは、究極的には、ある言語共同体に受け継がれてきた固有の概念体系を明らかにしようとする試みにほかならない。

言語共同体に固有の概念体系を反映する言語は、時代とともに少しずつ変化するとはいえ、その中核部分は該当する言語共同体の成員全体に受け継がれていく。そのように考えてくると、言語の意味は、Wierzbicka（1997：20-21）がClifford Geertz（1979）を引用しつつ提案している“culture”の定義にきわめて近いことがわかる。

> The culture concept to which I adhere denotes a historically transmitted pattern of meanings embodied in symbols, a system of inherited conceptions expressed in symbolic forms by means of which people communicate, perpetuate and develop their knowledge about and attitudes toward life.

実際、Wierzbickaの多年にわたる業績は、そのような立場からの深い洞察に満ちた実践であり、教えられるところが極めて大きい。ただそうした実りある実践的業績とは裏腹に、彼女はそこから導き出される結論を、通言語的普遍性を持つ概念プリミティヴによって説明しようとしている。この点は、一種の成分分析として、また還元主義的言語観として、認知言語学の立場からは容認しがたい。

言語の背後にある期待や仮定、価値判断は、人類という共通基盤に立つ以上、基本的な部分では共通するはずである。そのような普遍性の存在を前提にしてはじめて異なる言語や文化の比較が可能になるとも言える。しかし異なる文化や言語の比較が意味を持つのは、共通性の確認よりもむしろ、比較によってしか見えてこないものを明らかにするからだと思われる。それは、表面上は似ているように見えて実は異なる世界の捉え方を明らかにすることであろう。そのような異なる文化や言語の比較研究の最終的な結論が、少数のプリミティヴの、言い換えれば普遍的なスキーマの抽出であるとすれば、まさしくWierzbicka自身が批判した言語普遍主義への逆戻りではなかろうか。

言語を支える概念体系は、ある言語共同体の生活のすべてに関わり支配するものである限り、端的に表される一つの特徴によってそのすべてを説明し尽くせるというようなことはもちろんあり得ない。当然そこには複雑に絡み合うさまざまな特徴、相互に矛盾さえする特徴が見いだされるはずである。またあまりにも広すぎるその概念体系の総体について、決定的なやり方で何かを言うことは不可能であろう。ただ、言語共同体の外側に一つの視点を選び、その視点から光を当ててみれば、特に顕著な傾向というものが

他の言語のそれとのくっきりしたコントラストとして浮かび上がってくると思われる。異なる言語の母語話者同士が協力して、対象となる複数の言語の背景にある概念体系を明らかにしようとする方法の意義はこの点にある。

0.2　なぜ日露対照か

本稿では、日本語とロシア語の精神と身体についての概念体系を比較・対照し、両者の共通点と相違点の明示化を目指す。それでは、なぜ日露対照なのか。

ロシアはキリスト教文化の国であり、身体と精神を明確に区別する二元論的特徴を顕著に示している。この点だけを見ると、日本語との比較研究の対象として、ロシア語でなく英語を取り上げても同じような結果が出ると考えられよう。ところが、身体に対立するものとして考えられているものは、同じキリスト教圏と言っても英語とロシア語では異なっている。この違いを指摘したWierzbicka（1992：59）は次のように述べている。（下線は引用者。以下本稿を通じて同様である。）

> The ethnotheory embodied in the English language opposes the body to an (imajinary) entity centred around thinking and knowing. It clearly reflects, therefore, the much discussed rationalistic, intellectual, and scientific orientation of mainstream Western culture. The ethnotheory embodied in the Russian language opposes the body to an (imaginary) entity of a rather different kind: subjective, unpredictable, spontaneous (“things happen”), emotional, spiritual, and moral; an entity which is hidden and yet to reveal itself in intimate and cordial personal relations and one which is personal and interpersonal at the same time.

つまり、英語でbodyに対立しているものは合理的で知的という特徴を持つmindである。一方、ロシア語のтело（身体）に対立しているのは、感情的で道徳的という特徴を持つ душа（魂）[2]である。このように、「同じ」キリスト教文化と言っても、その内容にはかなり質的な違いがある。感情的で道徳的な душа（魂）を重要視しているロシア語は、英語と違って合理的な思考をあまり「信用」していない（Wierzbicka 1992：397）。感情及びそれと結びついた論理を重視する点は西洋よりも東洋の考え方に近いと考えられる。さらに、日本語に近いもう一つの特徴として、ロシア語は自発的現象を表す無人称文が多く、しかもそれらは増える傾向にある（これは、ドイツ語、フランス語、英語に見られる傾向とは正反対である）。ここからWierzbickaは次のように結論している。ロシア語話者の世界の捉え方は、英語話者のそれよりも受身的で運命論的であり、世界を人間の理解を超えたもの、人間がコントロールできる範囲を超えたものとして捉える傾向が強い、ということである（1992：430-432）。この傾向も東洋的な考え方に近いと考えられる。このように、二元論的特徴という点では日本語とは正反対であるロシア語は、

実は日本語に近い特徴も持っている。したがって、キリスト教文化対非キリスト教文化、あるいは西洋対東洋といった大きな枠組みの中で言語・文化を比較するとき、東洋と西洋の両方に近い特徴を持っているロシア語を取り上げて日本語と比較することは興味深い結果を生むと期待できる。

本稿では身体概念と精神概念とがそれぞれの言語を支える概念体系の中でどのように結びつけられ、どのように位置づけられるかを見ていくことにする。その方法としては両言語の慣用表現を比較し、そこに反映された問題の概念を明らかにする。いわゆる慣用句あるいは成句については、様々な定義がなされてきたが、実際には、慣用句とそうでないものとはそれほど明確には区別できない。また本稿の目的にはそうした区別に意味があるとも思われない。そこで本稿では、慣習化の度合の高い表現を広く表すものとして「慣用表現」という用語を用いることにする。

筆者が調べた限りでは、日露の慣用表現の比較によって両言語の背景にある概念体系に迫ろうとする研究はまだ存在しない。日英、日中などの慣用表現の対照研究はいくつかあるが、これまで見た限りでは、そのどれもが二言語間で形式上対応するように見える慣用表現を並べて見せ、または逆に対応するものがないという指摘をするにとどまっている。しかし異なる言語の比較を有意義なものにするためには、言語形式の対応が実際に概念の対応であるかどうか、つまりそれぞれの言語話者による世界の捉え方の対応であるのかどうかを見る必要がある。概念が研究対象として曖昧だからという理由で形式だけを比べるなら、何を自明の前提とするかが言語によって異なることが見過ごされ、重大な誤解を招きかねない。また逆に、次元の異なるデータを無原則的に寄せ集めて対象を規定しようとすれば反証可能性を欠くものとなろう。そこで本稿では、もっぱら慣習的に定着した言語形式とその意味というデータに基づいてこの対象に迫ることにする。これはまだこうした困難な試みの第一歩にすぎない。

1.　ロシア語における身体と精神作用

1.1　ロシア語のголова（頭）

1.1.1　精神の知的側面とголова（頭）

ロシア語で「頭」に対応するのはголоваである。以下、大意をそえて голова（頭）と表記する。括弧内の日本語訳は、ロシア語に辞書的に対応する日本語であるが、これは便宜上の方法であって、日本語と同じ概念を表すという意味ではない。本来は、表現«голова»と概念 голова を区別して表記する必要があるが、読みやすさを考えてロシア語に関しては同じ表記をすることにする。

голова（頭）の基本的意味は、首から上の部分を指している。しかし、この身体部位

は思考（知的精神作用）の座としても捉えられる。

⑴　голова не работает　（голова（頭）が働かない）うまく思考できない[3]

⑵　на свежую голову　（新鮮なголова（頭）で）

⑶　в голову ничего не идет　（голова（頭）に何も入らない）何も思いつかない

⑷　прийти в голову　（（何かが）голова（頭）に入る（来る））何かを思いつく

このように、голова（頭）は知的側面と結合している。голова（頭）と結びついたこの知的側面は、ロシア語の概念体系の中でどのように位置づけられているだろうか。それについては次節で取り上げる。

1.1.2　良識的判断能力とголова（頭）

Шмелев（1997b）などが指摘しているように、ロシアの概念体系では голова（頭）と ум が深く結びついている。ум の基本的な意味は「知力」であるが、その他にも、ум には良識的な判断能力という意味がある。ここではこの意味が重要である。（以下 ум（良識的判断能力）と表記）。голова（頭）と ум（良識的判断能力）との本質的な結合を示す例を次に挙げる。

⑸　Без уса борода, без ума голова.

（口ひげなしのほおひげは ум（良識的判断能力）なしのголова（頭））

⑹　безумный　（ум（良識的判断能力）のない（人））　狂人・天才

例文⑸のことわざは、「口ひげ」なしの「ほおひげ」がただこっけいなだけでそれを生やす意味がないのと同じように、ум（良識的判断能力）がなければ голова（頭）を持っている意味がないということである。Без мужа - что без головы; без жены - что без ума（夫がいないのは голова（頭）がないのと同じ。妻がいないのは ум（良識的判断能力）がないのと同じ）ということわざも上記のことわざとほぼ平行的に解釈できる。一方、例文⑹は、「良識的判断能力のない人」という意味からさらに慣用化が進んだ結果、世間の常識とはかけ離れた人、天才を表わすために用いられる。

上のような表現は、голова（頭）の本質が ум（良識的判断能力）であることを示している。実際、次の例では、голова（頭）はум（良識的判断能力）そのものを表す。

⑺　есть голова на плечах　（肩に頭がある）社会的に適切な判断能力がある。

⑻　без головы на плечах　（肩に頭がない）社会的に適切な判断能力がない。

上で見た例文は、ロシア語の概念体系の中で голова（頭）がかなりの重要性を持っていることを示している。ただし、голова（頭）のこの評価は絶対的なものではない。以下で見るように、ロシア語の概念体系の中で社会的常識よりもさらに重要視される精神的能力がある。

1.2　голова（頭）を超えるもの

1.2.1　感情とсердце（心臓）

ロシア語の概念体系の中でголова（頭）よりもさらに重要視されているのはсердце（心臓）である。сердце（心臓）のもともとの意味は「心臓」という臓器である。しかし、сердце（心臓）は感情の座としても捉えられている。以下はその例である。

(9)　с любовью в сердце　（сердце（心臓）の中に愛を持って）

(10)　с болью в сердце　（сердце（心臓）の中に痛みを持って）

また、ロシア語のсердце（心臓）は感情の経験主体の一部として捉えられる。

(11)　сердце радуется, когда видишь...

（～を見ると、сердце（心臓）が喜ぶ）

～を見ると、うれしくなる。

(12)　его любящее сердце　（彼の（人を）愛するсердце（心臓））彼の愛情

さらに、以下の例文が示すように、сердце（心臓）はアクティブな行為主体そのものとしても捉えられている。この行為主体は受動的に反応するだけではなく、外に対しても働きかける主体である。[4]

(13)　Перемен требуют наши сердца.

（我々のсердце（心臓）は改革を求めている。）

我々は改革を求めている。

上記の例文でсердце（心臓）は「改革を求める」というアクティブな行為主体になっている。以下の表現も同様である。

(14)　Любящие сердца соединились вновь.

（愛するсердце（心臓）たちは再び一緒になった。）

恋人は再び一緒になった。

上記の例文ではсердце（心臓）は関係を結ぶ個人そのものとして捉えられている。このような点でсердце（心臓）は日本語の〈胸〉と異なっている（それについては**2.2.2**参照）。

1.2.2　ある個人の性格とсердце（心臓）

ロシア語のсердце（心臓）はある特定の個人の性格として捉えられることもある。以下はその例である。

(15)　чистое сердце　（清らかなсердце（心臓））純粋な性格

(16)　доброе сердце　（やさしいсердце（心臓））やさしい性格

(17)　каменное сердце　（石でできているсердце（心臓））思いやりのない性格

(18)　коварное сердце　（狡猾なсердце（心臓））狡猾な、腹黒い性格

上記の例文が示すように、ある特定の個人の性格として捉えられるとき、сердце（心臓）はマイナスとプラス、両方の性質と結びつけられる。しかし、ロシア語のсердце（心臓）

そのものは、もっぱら清らかで他人の悩みに同情するというプラスの側面で捉えられている。次節でそれについて見てみよう。

1.2.3　сердце（心臓）そのものの性質

ロシア語の сердце（心臓）は、対人関係の中で心の暖かさや人の悩みに同情する能力と結びついている。そこで「сердце（心臓）がある／ない」という表現は「思いやりがある／ない」という意味になる。

(19)　(у кого-то) есть сердце（（誰かが）сердце（心臓）がある）思いやりがある

(20)　бессердечный （человек）（сердце（心臓）のない（人））人非人

сердце（心臓）の存在を否定している例文(20)の表現は非常に強い意味であり、問題の人物の人間性を完全に否定するときに使われる。一方、безумный（ум（良識的判断能力）のない（人））という表現は、すでに**1.1.2**で述べたように、世俗的なものを超えた人、天才を指すときに使われる。したがって、「ум（良識的判断能力）がないこと」は別に非難とはならない。一方、「сердце（心臓）がない」ことはロシア人にとって人格の否定であり、きわめて強い非難となる（Levontina, Шмелев参照）。ум（良識的判断能力）とсердце（心臓）のこの価値の違いはロシア語の概念体系に現れる価値観を示す例の一つである。

人の悩みに同情するという特徴を持っているロシア語の сердце（心臓）は、人と人をつなげるために重要な役割を果たしている。人の сердце（心臓）へと語りかけたり сердце（心臓）の方から語りかけたりすることは、利害関係とは無縁の思いやりや同情心など、人間精神の最もいい側面から最もいい側面へと語りかけることになる。例えば、恵まれない子供たちのための募金を募るために行われた24時間テレビの名前は «От сердца к сердцу»（сердце（心臓）から сердце（心臓）へ）であることがそれを示している。

「同情」、「思いやり」というのは、自分の利益のためではなく、他人のためのものである。そこで「開かれている心臓」は他人を信頼する気持ちと深く結びついている。

(21)　с открытым сердцем （開かれたсердце（心臓）で）無条件に信頼して

(22)　（人形を作る職人の言葉）Люди воспринимают их с открытым сердцем. И доверяют им, как дети.　http://smena.ru/exclusive/26/

（人々はそれら（人形）を開かれた сердце（心臓）で迎えている。そして子供のようにそれら（人形）を信頼している。）

人々は人間を信頼するように、人形を信頼している。

上記の例文が示すように、「開かれたсердце（心臓）」と「無条件の信頼」という言葉はほぼ同じ意味を表し、しばしば並べて用いられる。

すでに述べた通り、сердце（心臓）は自分の利益のためではなく、他人のために動くものである。そのような、自分の利益を求めない、他人に開かれた сердце（心臓）は、

清らかで正直なものとして捉えられる。以下はその捉え方を背景にした表現である。

(23)　Положа руку на сердце, я не знаю, что это такое.

（сердце（心臓）に手をあてて、これは何なのか、私にはわかりません。）

正直に言えば、これは何なのか、わかりません。

上記の例文の положа руку на сердце という表現は、「正直に言えば」という意味を表す。「正直」な気持ちを表現するために сердце（心臓）が出てくるのは、сердце（心臓）はうそとは無縁だと捉えられているからである。

今まで見てきたように、ロシア語の сердце（心臓）はアクティブな行為主体を表したり、ある特定の人の性格を表したり、思いやりを表したりすることが多い。このような使い方は、сердце（心臓）がもっぱら精神的存在を表す概念となっていること、つまり、身体的概念としての側面がきわめて希薄であることを示している。

1.2.4　共感を伴う理解とсердце（心臓）

ロシア語の сердце（心臓）は、その「正常な」状態において他人へと開かれていると言える。сердце（心臓）を閉ざしてしまった人は、他人を信用しない、対話を拒む人である。そこでロシア語話者は他人のсердце（心臓）が閉ざされている状態を見るに耐えず、その сердце（心臓）を「開く」努力をする。そのために必要なのは、その人のことを理解してあげることである。例えば、 найти ключ к его сердцу（彼の сердце（心臓）への鍵を見つけ出す)という表現は、ある人のことを理解するための努力を表す。つまり、ロシア語の сердце（心臓）は、 голова（頭）と結びついた論理的理解を超えた深い理解の概念と結びついている。以下はその例である。

(24)　Каждое ее слово доходит до сердца.

（彼女の一語一語がсердце（心臓）に届く。）

彼女の一語一語がしみじみとわかる。

この文は数学の問題の説明がわかったときについては使えず、あくまでも誰かの言葉に強く共感した場合に使われる。このような使い方は、сердце（心臓）がもともと感情の座であることから出てきていると考えられる。

1.1.2 で見たように、社会的成熟と結びつけられる ум（良識的判断能力）はロシア語の概念体系の中でそれなりに重要である。しかし、その価値は絶対的なものではない。ум（良識的判断能力）と結びついている голова（頭）と感情と結びついているсердце（心臓）を比べたとき、より深い理解と結びつく сердце（心臓）の方が重要なものであるのは明らかである。この点をさらに次の例で確認しておこう。これは、常にロシア人の口をついて出る詩であり、とりわけその最初の一行は文学作品の枠を超え、現代ロシア語の慣用表現の一つとなっている。

(25)　Умом Россию не понять,（ロシアは ум（良識的判断能力）では理解できない）

Аршином общим не измерить,（一般的な尺度では計りきれない）

У ней особенная стать,（ロシアは特別な気質を持っている）

В Россию можно только верить.（Ф. Тютчев）（ロシアはただ信じることができるのみ）

「ロシアは ум（良識的判断能力）では理解できない」というこの詩の最初の一行ではまず ум（良識的判断能力）の限界が示されている。そして、最後の一行には верить（信じる）という言葉が出てくるが、ロシア語の概念体系では「信じる」ことは сердце（心臓）（または душа「魂」）と結びついているものである。したがって、より深い理解は知的側面を表す голова（頭）ではなく、感情的側面を表す сердце（心臓）と結びついているということになる。これは英語の mind 重視の価値観とは違うところである。

このように、ロシア語の сердце（心臓）は論理的思考や良識的判断力と結びついた голова（頭）を超えるものである。この сердце（心臓）は、純粋で、共感や同情を通して他者とつながっているという特徴を持っている。この感情的で道徳的という特徴は сердце（心臓）を душа（魂）に近づける。ロシア語の概念体系の中ではтело（身体）に対立しているのは、（英語と違って合理的な mind ではなく）感情的で道徳的という特徴を持っているдуша（魂）である。次節では、сердце（心臓）と душа（魂）の関係を見ていきたい。

1.3　сердце（心臓）とдуша（魂）

ロシア語の概念体系（そしてロシア文化全般）を語るとき、душа（魂）は避けては通れない重要な概念である。ある国の文化を理解するために「キーワード」の抽出が役に立つとしている Wierzbicka（1992）は、душа（魂）を、судьба（運命）及び тоска（メランコリー）とともにロシア文化のキーワードとしている。

体の一部であるロシア語の сердце（心臓）は、身体の一部でない душа（魂）に近い意味を持ち、両者の置き換えが可能な場合が多い。例として以下の表現を見てみよう。

(26)　бессердечный／бездушный

（сердце（心臓）のない／душа（魂）のない）

人非人

(27)　Любить／ Верить／ Ненавидеть всем сердцем ／всей душой.

（сердце（心臓）全体／душа（魂）全体で愛する／信じる／憎む。）

сердце（心臓）と душа（魂）は置き換えの可能な場合が多いだけでなく、以下の例文が示すように、両者は類義表現として二つ並べて使われることも少なくない。

(28)　Всем сердцем и душой благодарите Бога.

（сердце（心臓）全体と душа（魂）（全体）で神様に感謝しなさい。）

このように、置き換えが可能だったり並べて使われたりすることから сердце（心臓）と душа（魂）はかなり重なり合っていると言える。したがって、сердце（心臓）は身体部位である以上に、душа（魂）と並ぶような精神的存在として捉えられていると言うことができる。

ロシア文化では、Шмелев（1997a）などが指摘しているように、「高尚なもの」と「卑俗なもの」という二つのレベルの対比が常に問題とされ、価値評価では前者の方がはっきりと重要視されている。この特徴は、ロシア文化全体に強い影響を与えているロシア正教に根ざしている（詳しくはЛотман и Успенский（1994）参照）。その反映として、ロシア語では、多くの重要な概念はこの二つのレベルに対応する二つのヴァリアントを成している。例えば、 истина（日本語の「真実」に近い）と правда（本当のこと）や благо（日本語の「善」に近い）とдобро（いいこと）、радость（日本語の「喜び」に近い）と удовольствие（楽しみ、快感）などは、それぞれ「高尚なもの」と「卑俗なもの」という異なるレベルに属する類義語のペアである。

ロシア語の сердце（心臓）と душа（魂）もそのようなペアを成していると考えられる。つまり、身体の一部である сердце（心臓）は（他の身体部位と同様に）「卑俗なもの」のレベルであり、身体の一部でない душа（魂）は「高尚なもの」のレベルに属している。両者のレベルの違いを示すものとして「愛」の気持ちを表すときの両者の使い分けが挙げられる。異性間の世俗的な恋愛は主に сердце（心臓）と結びつけられるのに対して、異性愛を超えた無償の愛は душа（魂）と結びつけられる。例えば、「意中の人」という意味でおどけるときに使われる дама сердца（сердце（心臓）の女性）という表現の сердце（心臓）を душа（魂）に置き換えることはできない。同様に「女たらし」を表す сердцеед（（女性の）сердце（心臓）を食い尽くす人）という表現の中の сердце（心臓）も душа（魂）に置き換えることはできない。置き換えができない理由は、これらの表現があくまでも卑俗な恋愛について用いられることにある。また、誰かに結婚を申し込むことを表す предложение руки и сердца（手と сердце（心臓）の提供）という表現の сердце（心臓）も、душа（魂）に置き換えられない。ここでもその理由は、「結婚」は「この世」のものであり、卑俗なものとして捉えられる、ということにある。一方、「高尚な」ものとして捉えられたときの「愛」は、сердце（心臓）よりも душа（魂）と結びつけられる。例えば、以下に挙げるプーシキンという詩人の中に出てくる「愛」は душа（魂）と結びつけられている。この詩は、ロシア人で知らない人がいないと言っていいほど有名な詩であり、愛を語るときにロシアで一番よく取り上げられる詩だと言ってよかろう。愛している女性に振り向いてもらえなかった主人公は、引き下がりその女性の幸せを祈っているというのが、この詩の内容である。その最初の2行を見てみよう。

(29)　Я вас любил: любовь еще, быть может

В душе моей угасла не совсем　（以下は省略）
（私はあなたを愛していました。愛は多分
私の душа（魂）の中で完全に消えていません）

卑俗な恋愛感情ではなく、「本当の愛」を感じているからこそ、主人公はその気持ちの座として сердце（心臓）ではなく душа（魂）を選択している。逆に言うと、ここでсердце（心臓）という表現を使うと、愛の気持ちは「高尚」なものではなくなってしまう。

以上見てきたように、сердце（心臓）と душа（魂）は重なる部分が多く、両者は連続的につながっている。しかし、сердце（心臓）と душа（魂）は「卑俗なもの」と「高尚なもの」という二つの別のレベルに属しており、身体概念の痕跡を持つ сердце（心臓）よりも、身体性をまったく持たないдуша（魂）の方がより高い位置を持つものとして捉えられている。しかもこの位置づけは、日常生活において生きている位置づけである。次節ではこの点を取り上げたい。

1.4　ロシア語におけるдуша（魂）の重要性

「高尚なもの」と「卑俗なもの」の対立はどの言語にもあるだろう。しかしロシア語では、「高尚なもの」が日常生活においても重要だということに注目する必要がある。つまり、ロシア語の душа（魂）は、文学的文脈で用いられる特殊な概念ではなく、日常の実際的な場面でごく普通に現れる身近な概念であるということである。例えば、375年周年記念日にちなんだあるロシアの市長の演説のタイトルは　«... И душа с душою говорит»（…душа（魂）と душа（魂）が語り合っている）である。このタイトルからわかるように、演説の中で市長は論理や利害ではなく、市民の сердце（心臓）や душа（魂）に訴えることになる。以下はその演説からの引用である（«Городские новости» Муниципальная газета Красноярска No.100 (1003), пятница, 5 сентября 2003 года.）。

(30)　А ведь город – как родное дитя: чем больше забот ему отдаешь, тем милее он сердцу, дороже и любимей.
（町は、血を分けた子供のようです。世話をすればするほど、сердце（心臓）にとっていとしく、大事で親愛なものになっていきます。）

(31)　И пусть наши дети только в Красноярске встречают свою любовь и женятся, прирастая душой к родной земле – ведь в этом и есть верный залог ее будущего процветания!
（我々の子供たちがクラスノヤルスク市の中で自分の「愛」に出会い結婚することで、душа（魂）をふるさとに根付かせることを祈っています。これこそふるさとのこれからの繁栄のもととなるでしょう。）

上記の例が示すように、市長は論理や利害ではなく、сердце（心臓）や душа（魂）に訴

える方略をとっている。これは文飾の多いきどった表現ではなく、ロシア語話者にとってわかりやすく馴染み深い表現にすぎない。文学作品ではなく、市民に語りかける演説の中に сердце（心臓）や душа（魂）が頻出することは、それらが身近な概念であることを示している。日本語にも「魂」という言葉はあるが、それほど日常的な言葉ではない。「魂」が政治家の公的な演説に現れたとすれば、全体の文脈から浮き上がったものになってしまうであろう。

ロシア人にとって「高尚なもの」が重要であるのは、言葉においてだけではない。国の経済状況が好ましくないときに宇宙開発や芸術などの非実用的なものに情熱を燃やし、莫大なお金を使うことを国民が支持してきたという歴史的事実にも、そのような「高尚なもの」を重要視する考え方が現れている。政治家や軍人はともかく、一般国民は宇宙開発に人類の壮大な夢の実現を見たからである。

全体を振り返ってみると、合理的、知的側面や実際的な生活上の知恵と結びつく голова（頭）より、感情という非合理なものと結びつくсердце（心臓）の方が上位におかれ、それよりさらに上位に身体性を超えた душа（魂）が来るという図式が見てとれる。このことから、ロシア語話者は、身体性を脱却する方向を目指していると言える。身体性を脱却するという点に関しては、ロシア語の概念体系は他のキリスト教文化と同じであろう。しかし、身体より上に置かれているものは、英語の mind のような合理的精神ではなく、非合理的な道徳的な душа（魂）であるという点にその特徴がある。

2.　日本語慣用表現に見る身体と精神

2.1　日本語の頭

2.1.1　精神の知的側面と〈頭〉

ロシア語と同様に日本語においても、「頭」の表す概念〈頭〉は精神作用の知的側面、つまり論理的思考や知能と本質的に結びつくものとして捉えられている。それは「頭」を含む慣用表現から明らかである。例えば、「頭が空っぽ」、「頭にある」、「頭に浮かぶ」、「頭に入る」、「頭に入れる」、「頭の中が白くなる」など多くの慣用表現において、この概念〈頭〉は思考や記憶などの知的精神作用や知能の容器として捉えられている。また、「頭を使う」、「頭を絞る」、「頭を悩ます」、「頭を整理する」、「頭を痛める」、「頭をほぐす」、「頭がいい」、「頭が悪い」、「頭が切れる」、「頭が鋭い」、「頭が鈍い」、「頭の回転が速い」、「（～だけの）頭がある」など多くの慣用表現においては、それは単なる容器にとどまらず、知的精神作用や知能そのものとしても捉えられている。そのほか、「年を取ると頭が固くなる」や「若いのに頭が古い」などのように使われる「頭がかたい」や「石頭」、また「頭が古い」といった慣用表現では、〈頭〉は個人の思考の傾向を表すも

のとして捉えられている。

このように〈頭〉が精神の知的側面を表すという点に関しては、日本語はロシア語との平行性を示している。しかし〈頭〉という概念にその本質的要素として組み込まれている社会的期待や価値は、ロシア語と日本語とではかなり異なっており、したがってその過剰や欠如に対する扱いにおいても違いが生じてくる。それを以下に見ていきたい。

2.1.2 〈頭〉の特徴：非現実性、社会的未熟性

多くの慣用表現において〈頭〉はある個人の持つ知的能力を表す。したがって〈頭〉はそれ自体としてはプラスの価値を持つものである。しかし社会生活という文脈の中では、〈頭〉はむしろマイナスの価値を帯びるものとして捉えられる傾向がある。

例えば「頭でっかち」という慣用表現がある。この表現は、文字通りには頭部がそれを除く身体部分に比べて不釣り合いに大きいことを表すが、慣用的には精神作用としての〈頭〉の過剰を表し、その過剰を通じて〈頭〉と対立するものの欠如または不足を表す。次はその典型的な例である。

(1) 頭でっかちの足手まとい。初任幹部に対する悪印象を一手に引き受けていた風間が相手だっただけに、このときの若狭の反応はより激しいものになった。

（福井晴敏『亡国のイージス』上、講談社文庫、423）

(2) 若手教員は経験なく頭でっかち

http://www.iwate-np.co.jp/news/y2000/m200003/n20000304.html

(3) どうも日本人は、ともすると頭でっかちになる傾向があるようだ。理屈好きといおうか。現実や事実を直視せず、知識の上に構築した理論だけをよりどころにして議論したり判断したりしようとする。

http://www.t3.rim.or.jp/~boogie/e222.htm

例(1)において「頭でっかち」は、「初任幹部」や「足手まとい」という表現が示すように、地位は高いが実務能力はなく、乗組員の社会において役に立たない人物を指して用いられている。ここで〈頭〉は高度の知識や知能を表し、その過剰（「でっかち」）が対立概念（実務能力）の欠如または不足を表すように機能している。例(2)でも同様に、〈頭〉は「経験」のない「若手教官」の知識や理念を表し、その過剰が対立概念である「経験」の欠如を、つまり教員の社会での未成熟さを表している。また、例(3)でも、〈頭〉は「理屈」すなわち「知識の上に構築した理論」を表し、その対立概念は「現実や事実を直視」した意見や行動である。つまりここでは、〈頭〉は社会的未成熟の印として批判的に捉えられた知識や理屈、また非現実的な理念などと結びついた概念である。

また日常よく使われる表現に、「頭で考える」、「頭でわかる」などがある。これに「自分の」を加えた「自分の頭で考える・わかる」という表現がほとんど例外なくプラス価値を帯びて用いられるのに対して、何の限定もない「頭で考える・わかる」は一般に否

定的価値を帯びて用いられる。

(4)　頭で考えてワカッタつもりにならないことである。

http://www.asahi-net.or.jp/~NG1F-iST/body.html

(5)　これじゃいけないと頭ではわかりつつ、日々の仕事に追われている人も多いんじゃないだろうか。

www.ricoh.co.jp/appliance/02_arekore/ colum/tanaka/04.html

(6)　日本人は頭でわかり切っていて、論じ尽くされているこの制度を生きることを知らない。本書は民主主義を生きるための指針を示す。

http://www.esbooks.co.jp/shelf/social/fair/political-forum/03.html

上の例において、「頭で考える」ことは本当に意味のある理解をもたらさず、また「頭でわかる」ことは真の理解とはみなされない。なぜなら〈頭〉は、(「日々の生活に追われる」のではなく）実践すること、あるいは「生きること」の対立概念だからである。つまり真の理解は実践的経験と結びつくものであるのに対し、〈頭〉は実践的経験の欠如または不足として捉えられる。社会における実践の欠如や不足は社会的未成熟にほかならない。

このように日本語の概念体系において、精神の知的側面、そしてそれと結びつく〈頭〉は、しばしば社会的未成熟の印として扱われる。一方、ロシア語の〈頭〉は、**1.1.2**で見たように、社会的に成熟するために必要な分別というべきものと結びついている。そこで〈頭〉がないことを表す表現は社会的に適切な判断を下せない人物を指すために用いられる。同じく精神の知的側面を表しながら、ロシア語と日本語の〈頭〉はそれぞれの属する言語共同体の概念体系の中でかなり異なるイメージで捉えられているということになる。

日本語において、〈頭〉が表す知的側面が社会的未成熟の印にすぎないなら、それと対置され、それを超えるものは何か。以下の例が示すように、それは〈胸〉あるいは〈腹〉であると考えられる。

(7)　頭では解る、しかし胸では納得（なっとく）しない.....

www.aozora.gr.jp/cards/souseki/htmlfiles/meian/meian151_188.html

(8)　頭ではその理屈が分っていても、胸の思いはなかなかそれに賛同してくれぬまま、レース当日を迎えるに到った。

http://www.tokyonews.net/html/old/monthly/2000-101112/kaiko12.html

(9)　頭では分かったつもりでした。しかし、実際にその効果を体験して、本当の大切さがやっとわかりました。腹のそこから納得できました

http://www.d4.dion.ne.jp/~masao_n/maiopinion/sub6.htm

(10)　グローバル化と「頭」ではわかっても「腹」で受け入れるのは難しく、外資規

制を緩めても完全になくせないと私は見ている。

http://homepage1.nifty.com/buttchy/sakusaku/5_1.htm

上のような表現は特殊な文脈にしか現れないというものではない。「頭ではわかる」が「胸では納得しない」、「腹では納得しない」という表現、あるいはそれに類似した表現は、日本語話者にはなじみ深いものである。以下では〈胸〉および〈腹〉がどのような概念であるかを見ていきたい。

2.2　頭を超えるもの

2.2.1　「思い」の座としての〈胸〉と〈腹〉

精神作用の感情的な側面はとりわけ〈胸〉と結びついている。それは、いわゆる慣用句として辞書の見出しとなるような特に慣用性の高い表現に明らかに見て取れる。例えば、「胸をえぐる」、「胸にこたえる」、「胸が騒ぐ・胸騒ぎがする」、「胸が痛い・胸を痛める・胸の痛み」、「胸が張り裂ける」、「胸につかえる」、「胸が潰れる」、「胸が塞がる」、「胸がつまる」、「胸を冷やす」、「胸が晴れる・胸を晴らす」、「胸をなで下ろす」など多くの慣用表現において、悲しみ、悩み、悔恨、不安や安堵といった暗い感情が〈胸〉と結びついており、また「胸が躍る・胸を躍らせる」、「胸がとどろく・胸をとどろかせる」、「胸がときめく・胸をときめかせる」、「胸が弾む・胸を弾ませる」、「胸が膨らむ・胸を膨らませる」、「胸が焦がれる・胸を焦がす」などにおいては、期待や憧れといった明るい感情が〈胸〉と結びついている。さらに「胸を打つ」、「胸が熱くなる・胸を熱くする」、「胸が一杯になる」、「胸に迫る」などにおいて、感動と呼べる強い感情が〈胸〉と結びついている。

またそれほど明確に名つけられない感情や思考も〈胸〉と結びつけて捉えられる。人はさまざまなことを「胸の中で」考え、さまざまな感情にひたる。そうしたさまざまな思考や感情は、「胸に湧き」、「胸に込み上げ」、「胸に溢れる」ものであり、また「胸を去来する」ものである。さらに「胸のうち」や「胸中」はそうした思考や感情それ自体を表す。ここでは思考と感情は明確に区別されていない。このような思考も感情も区別なく含む精神作用を端的に表すものとして、「思い」や「思う」という語がある。〈胸〉は「思い」、「思う」で表されるような精神作用と結びついている。

(11)　この作家への感謝と追悼の思いが、そのインクの匂いの立ち上るような原稿を手にしているうちに、堀口の胸に静かに込み上げた。

（篠田節子『妖櫻忌』、角川書店、9）

(12)　駅前の広小路のごみを拾って歩くのは、今は一人。「後に続く人はもう出てこないのだろうか」。3人の胸の内にはそんな思いが交差する。

www.sakigake.co.jp/kikaku/2001/teruhi/teruhi20010218.html

しかし日本語では〈胸〉だけではなく〈腹〉もまた、思考や感情という広い範囲の精神作用と結びついている。まず「腹が立つ」、「腹の虫がおさまらない」、「腸（はらわた）が煮えくり返る」のような怒りを表す慣用表現が〈腹〉と感情の結びつきを示している。また人は「腹」や「腹の中」でさまざまに思考し、さまざまな感情を抱く。

(13) 「以前の職場では、誰かが契約を決めても、口では“おめでとう”と言いながら、腹では喜べない自分がいた。

http://www.marimo-ai.co.jp/recruit/detail_eigyo03.htm

(14) 伝十郎は腹の底から感心してうなずいた。

（澤田ふじ子『けもの道』、光文社文庫、266）

(15) 地権者の腹の中では「期待」と「懐疑」が複雑に交錯している。

http://www.tokachi.co.jp/kachi/jour/yosan/1.htm

(16) 人数が多い方がより楽しいという単純な理由や、一人当たりの演奏会負担金が減るという腹の内もあるのですが。

www.ne.jp/asahi/waseglee/ob/1999/obtannto1.html

上記の例文から明らかなように、日本語では〈腹〉は精神作用と密接に結合している。一方、ロシア語では、живот（腹）は、жить（生きる）、жизнь（生命）、животное（動物）という表現と語源的に結びついており、生命の源としては重要視されているものの、より高尚なものとされる精神作用とは一切結びつかず、ロシア語の概念体系の中ではживот（腹）は価値の低いものとして扱われている。これは日本語とロシア語の大きな違いである。

広く思考や感情と結びつくという点で、それもどちらかといえば情緒的な側面と結びつくという点で、日本語における〈胸〉や〈腹〉は、ロシア語の〈心臓〉にある程度対応している。しかしそれぞれの概念体系の中でそうした概念がどう位置づけられているかはまた別の問題である。そこで、日本語概念体系における〈胸〉や〈腹〉の特徴を以下に見ていきたい。

2.2.2 〈胸〉、〈腹〉の特徴：受動性、閉鎖性、不透明性、個人性、身体性

日本語概念体系における〈胸〉および〈腹〉の特徴としては、まず受動性が挙げられる。先に挙げた「胸」あるいは「腹」を含む慣用表現を見渡してみると、その多くが何らかの刺激によって身体部位に生じた状態変化を表す表現であることが注目される。例えば悲しみや不安によって、「胸」は「騒ぎ、痛み、張り裂け、潰れ、塞がり、つまる」という状態となり、また喜びや感動によって、「胸」は「ときめき、とどろき、はずみ、踊り、膨らみ、熱くなり、焦がされ」、あるいは「打たれる」という状態となる。また、「腹が立つ」、「腹の虫がおさまらない」、「はらわたが煮えくり返る」は、何らかの出来事によって引き起こされる「腹・はらわた」の状態変化として怒りという感情を示して

いる。また「思い」が「胸を去来する」、「胸に湧く」、「胸に溢れる」などの表現においては、〈胸〉は精神作用の生じる場となっている。また上の例(13)～(16)の「腹」や「腹の中・底・内」も、精神作用の生じる場である。

このように精神作用を外的刺激に対する反応として捉えるかぎり、その反応を起こす〈胸〉や〈腹〉はあくまでも受動的な存在である。それが反応の生じる場であればなおさらである。実際、日本語の「胸」や「腹」は、ロシア語のсердце(心臓)と違って、それ自体が他者に向かって働きかけたり、積極的に行動したりする自立的な主体とはなりにくい。次のようなロシア語の表現に相当する日本語の文は、かなり不自然な翻訳調の文か、よほど修辞性のあらわな技巧的な文以外には考えられない。

(17) (露) Перемен требуют наши сердца.

(我々のсердце(心臓)は改革を求めている。)

(日) 我々の胸は改革を求めている。／我々の腹は改革を求めている。

(18) (露) Любящие сердца соединились вновь.

(愛するсердце(心臓)たちは再び一緒になった。)

(日) 愛する胸たちは再び一緒になった。／愛する腹たちは再び一緒になった。

このように、日本語概念体系における〈胸〉や〈腹〉の顕著な性質は、まずその受動性にあるということができる。

〈胸〉および〈腹〉の第二の特徴は閉鎖性および不透明性である。まず「胸」や「腹」という語は、「おさめる」、「たたむ」、「しまう」などという表現とともに好んで用いられる。こうした表現は、概念〈胸〉および〈腹〉が閉ざされた空間であることを示している。

(19) お里帰りは早い頃だったのに、時期が合わない。しかしかりにも口外すべきでない事なので、胸におさめて黙っていた。

(CD-ROM版・新潮文庫の100冊・「新源氏物語」、174)

(20) これまで胸にたたみこんだまま、あの出来事については誰にも云わなかった。

(CD-ROM版・新潮文庫の100冊・「さぶ」、309)

(21) 女が自分の意見を言うなんて持つてのほかでした。だから、叔母はすべて自分の腹ひとつにおさめて、口をつぐんで生きていたんです。

(宮部みゆき『龍は眠る』、新潮文庫、217)

(22) 酒が人を裸にする。普段腹にしまいこんでいるものが、酒の助けを借りて吐き出されるというのは本当のようだ。

http://www.h4.dion.ne.jp/~indology/diary4.htm

また「胸の内(底)」や「腹の内(底)」などという表現は、「見抜く」、「見透す」、「さらす」、「さらけ出す」、「明かす」などの開放を表す表現と頻繁に共起する。このことは、

〈胸〉や〈腹〉の内部が外からは見えないこと、不透明であることを示している。

(23) いまのいままでふじ子のことを考えていた自分の胸の底を、見透かされたような思いがした。　(CD-ROM版・新潮文庫の100冊・「塩狩峠」、379)

(24) いや、もしかしたら松浦のほうこそ、じつは女の腹の内をとっくに見抜いていたのかもしれない。　(杉本苑子『能の女たち』文春新書、152)

(25) 父は自分で高い壁を作り、家族とでも腹の内を晒して話すことがない。
(島崎今日子『この国で女であるということ』、教育史料出版界、177)

以上に見てきた受動性、閉鎖性、不透明性という特徴は、精神的意味が活性化される場合においてさえ、〈胸〉および〈腹〉が物理的な身体の概念の持つ特徴を強くとどめていることを示している。身体部位の概念としては、〈胸〉と〈腹〉は外から覗くことのできないものだからである。さらにこの身体性という特徴は、〈胸〉および〈腹〉という概念を、他の人間と明確に切り離された一人の個人に属するものとする。その意味でそれは個人性という特徴をも持つ。つまり〈胸〉および〈腹〉の顕著な特徴は、受動性、閉鎖性、不透明性、個人性という側面を持つ身体性である。

ここで「身体」あるいは「身体性」というとき、それが表すのは心身二元論に立つ身体概念、つまり物理的存在としての身体の概念である。実際には、日本語の身体概念はそのような身体概念をも包含しつつさらにそれ以上のものを含む概念であり、その点は後で論じることになるが、ここでは二言語比較の都合上、ロシア語と共通する身体概念を指して「身体」と呼ぶことにする。〈胸〉と〈腹〉は、この意味において「身体性」の度合いの高い概念である。

〈胸〉と〈腹〉とは、ともに「思い」の座であり、上に見たような特徴を共有する。しかし日本語の概念体系においては、〈胸〉よりも〈腹〉がより重要である。そこで次節では〈腹〉という概念を中心に考察してみたい。

2.3　日本語における腹の重要性

2.3.1　〈本音〉としての〈腹〉

先に挙げた不透明性という特徴は、特に〈腹〉において強く現れる。それを示す一つの例が「腹を割って話す」という慣用表現である。「割る」、つまり強制的に力を加えて開くことをしなければ中身が見えないほど、〈腹〉は不透明なものである。そしてその中身は、次の例が示すように、「本音」と呼ばれるものに相当する。

(26) 相手が腹を割って本音で話してくれるようになるためには、どうしたらいいでしょうか。　http://www.entre.co.jp/manual/a_71.html

(27) 建前だけでやっていたらいつまでも建前だけの仲です。腹を割って話さないと本当の交流はできません。

http://www.geocities.co.jp/SiliconValley-Cupertino/6231/honnne.htm

〈胸〉と〈腹〉はどちらも〈思い〉と結びついているが、田中（2003）でも示したように、〈胸〉が他者の共感を容易に引き起こす感情や思考、つまり社会に受け入れられやすい思いと結びついているのに対し、〈腹〉は他人への軽蔑や怒り、自己中心的な欲望や不満といった、社会によって負の価値を与えられがちな思いと結びつく傾向がある。そのため「胸」と「腹」はある程度は重なり合いながらも、典型的なケースにおいては入れ換えることが困難となる。〈腹〉がそうした種類の思いと結びつく傾向は、〈腹〉を〈胸〉以上に不透明なものにする。そうした種類の思いは、本人のためにもまた他者のためにも、多くの場合隠しておくほうが適切だからである。人が抱く思いのうちでも〈腹〉と結びつくのは、特に不透明で他人と共有しがたいという特徴を持つ思いである。

実際、このような「腹の中」の思い、つまり〈本音〉に対置されるのは、例えば次の例のように「口」で言う意見、または「顔」の表情で伝えるメッセージである。

(28) １人でも賛成者が多い方がいいからアメリカは口では文句は言わないが、腹では軽蔑の対象だ。 http://www.jiyuto.or.jp/JPN/interview/2003/03n0319oz.html

(29) あの管理官、顔じゃ笑っていたけど、腹の中じゃかなり怒っていたぞ。

（佐竹一彦『ショカツ』、角川文庫、240）

語られる言葉や顔の表情は他者に向けて公開されたもの、目に見えるものである。したがってこれに対立する〈腹〉は見えないもの、不透明なものである。

本音としての〈腹〉に対置される概念を、公開性とは別の視点から見てみよう。次の例が示すように、〈腹〉には〈頭〉と結びついた理念・理想が対置される。

(30) 私には、この国(米国)が世界の警察官であるべきだと頭で考えながら、腹では米国の若者の血を外の地で流すことには極度に神経質になっているように思えてくる。 http://www.glocomnet.or.jp/okazaki-inst/auer.hns.html

上の例の「この国が世界の警察であるべきだ」という意見は、「べきだ」の意味からして、判断主体が理論的に正しい、つまり知的合理的精神に基づいて正しいとする理念である。しかしそれは同時に、「頭では」が示すように、判断主体によって非現実的なものとして否定されている。〈頭〉は、すでに示したように、しばしば経験に裏づけられない知識や理論、またそれに基づいた非現実的な理想と結びつく概念である。一方、「腹では」によって〈本音〉と結びつけられているのは、そのような理念や理想の実現に伴う犠牲を払いたくないという功利的、現実主義的な感情である。

同様に次の例でも、「頭」への言及こそ無いものの、理念対本音という本質的に同じ対立が見て取れる。

(31) 育児休業を男性が取ることについては、企業はまだ腹では認めていないところが多いのではないか。 http://www.eqg.org/news/70/A10.html

「育児休業を男性が取る」ことは、社会が要請していること、理論上正しいとされる理念である。しかしそれは判断主体にとっては実践するわけにはいかない非現実的なものでもある。したがってそれは本質的に〈頭〉と結びつくべき性質のものである。一方、判断主体の〈腹〉つまり〈本音〉は、その実現に伴う負担を担いたくないという現実主義的、打算的な思いである。ここにあるのは、理性対感情の対立、共同体全体の利益対個人の利益の対立という二重の対立の傾向である。〈腹〉と結びつく〈本音〉は、感情的で自己中心的、そして現実主義的な思いであり、それは社会全体の利益という視点から肯定される理論や理想とは対立しがちな傾向を持つ。

本音（裏返せば建前）が重要な概念であるかどうかは、どの文化にとっても自明というわけではない。ロシア語話者にとってはこの概念はさほど重要ではない。しかし日本語話者にとっては、しばしば人々の話題にのぼり、対人関係において最も人々が気にするような重要な概念である。インターネットを覗いてみれば、ホームページのタイトルやキャッチフレーズとして「本音」という語が溢れている。これは人々が「本音」をいかに気にしているかの十分な証拠であろう。〈腹〉はそれと結びつくという意味で重要な概念である。

2.3.2　存在の基盤としての腹

日本語概念体系における〈腹〉には、もう一つの重要な側面がある。それは「腹を括る」、「腹を据える・腹が据わる」、「腹を決める・腹が決まる」、「腹を固める・腹が固まる」などの慣用表現に反映される側面である。

まず「腹を括る」、「腹を据える（腹が据わる）」は、次のような文脈で現れる。

(32)　失敗すれば俺は一文無しになる。しかし、このままでは俺は永遠に人生の敗者だ。ここは腹を括らねばなるまい。俺の人生で最後で最大の賭けである。

http://www1.u-netsurf.ne.jp/~k-simizu/KAKE.htm

(33)　人間、一生になんどか、腹を括らねばならない時があると思う。

http://www.kani.com/kon/2001.html

(34)　「何かあったら、取り合えず盾にならなきゃな」と、男らしく腹を据え、辺りに気を配りながら、できるだけ皆と間を開けないように歩く。

http://www.spicycandy.net/travel_folder/tra.text-4/travel-35.html

(35)　戦争中に東条に反対したのはまさに命がけのことである。いまの政治家では考えられないほど腹が据わり、豪気さを持っていた。

http://www.php.co.jp/bookstore/serial/12/12_1.html

ここに共通するのは、時には命に関わるような困難な事態が予測される場合に、主体がそれと直面して戦う、あるいはそれを運命として受け入れて生きていくことを選択する、という状況である。それは、典型的には人生の節目に当たる場面、あるいは生き方の選

択を迫られるような人生の岐路というべき場面である。

このように「腹を括る」、「腹を据える」は、困難な現在の状況、あるいは困難が予想される未来の状況を、承知の上で選び取る行為を表している。このような行為、また「腹が据わっている」が表すような状態からなる複合事象の概念を「覚悟」と呼ぶことができよう。上の例が示すように、〈腹〉と結びついた〈覚悟〉は、社会の中での個人の生き方、言い換えれば他者との関係における個人のあり方を最も先鋭に示すものである。その意味で〈腹〉は、社会の中で生きる現実的な存在としての個人の中核ということができる。そしてその特徴はやはり現実性、世俗性である。

「腹を括る」、「腹を据える」という慣用表現が、〈覚悟〉の持つ勇気や意志の強さという側面に焦点を当てたものとすれば、「腹を決める」、「腹を固める」という慣用表現は、そこに含まれる〈決断〉の面に焦点を当てたものと言えよう。

(36) 「合併」か「単独存続」か。二つの選択肢を残していた内山勝龍山村長もその場で腹を決め、翌日の全員協議会で「合併は避けられない」と発言し、合併に向けて大きくかじを切った。 http://www.shizushin.com/2003/kanhamanako/

(37) いよいよブッシュ大統領もブレア首相も腹を固め、国連での正当化決議の有無にかかわらず、戦争に参加し、早期戦争終結に政治生命をかける。

http://www.glocom.ac.jp/project/chijo/2003_04/2003_04_42.html

また覚悟や決断の実質的内容である意向や意図を「腹（肚）」という語が表すこともある。

(38) 当時日本の国内事情は、ワシントン、ロンドン両条約をそのままの形で今後とも認めることは到底出来ないという空気が支配的で、日本政府の肚は、ワシントン条約の廃棄にほぼ決っていた。

（CD-ROM 版・新潮文庫の 100 冊・「山本五十六」、115-116）

以上に見てきたところから、日本語概念体系における〈腹〉の重要性は明らかである。〈頭〉を超えるものは結局〈腹〉に集約される。人生の岐路における究極の選択を含む〈覚悟〉は、〈腹〉を通じて生の個人的感情である〈本音〉と結合する。〈腹〉は個人的存在の中核である。

2.4 日本語の身体概念

この第 2 章では、〈頭〉、そしてそれを超えるものとしての〈胸〉および〈腹〉という概念を考察し、日本語概念体系における精神と身体の捉え方を見てきた。そこで明らかになったのは、精神的意味を帯びる場合でさえこうした概念が持ち続ける受動性、閉鎖性、不透明性、個人性という特徴であった。これらの特徴は、結局身体性に収束する。このような特徴の背景には日本語の身体概念の問題があると考えられる。そこで本節で

は日本語の身体概念を取り上げることにする。

その前に、精神的意味を表す日本語慣用表現が顕著な身体性を示すという本稿の主張を、別の言語事実から確認しておきたい。その言語事実とは、内臓の概念の持つ精神性と精神的領域に及ぶ消化メタファーの広がりである。

2.4.1　内臓の精神性と消化メタファーの広がり

精神的意味を担う日本語の慣用表現には、腹部およびその周辺の内臓の概念までがしばしば参与する。それは、例外として片づけられない程度の数にのぼる「腸（はらわた）」や「腑」、そして「肝」を含む慣用表現である。

まず「肝」については、激しい驚きを表す「肝を潰す」や「度肝を抜かれる」、恐怖を表す「肝を冷やす」や「肝が縮む」、また危険に立ち向かう勇気が備わっていることを表す「肝が据わって（座って）いる」、人並み以上にそれが備わっていることを表す「肝が太い」があり、また何か大事なことを深く記憶にとどめるという意味の「肝に銘じる」がある。

次に「腑」については、意欲も気力もなくした精神状態またはそうした人物を表す「腑抜け」、一種の理解を表す「腑に落ちる」がある。「腑」は広く内臓を表す語であるが、専門家はとにかく一般の日本語話者にとっては、特に腹部との結びつきが強い概念であると思われる。なぜなら「腑に落ちる」という慣用表現に変わるものとして、「腹に落ちる」という表現も現代日本語で実際に使われているからである。

そして最後に「腸」については、激しい悲嘆を表す「腸がちぎれるような悲しみ」や「断腸の思い」、激しい怒りを表す「腸が煮えくり返る」という感情を表す慣用表現がある。「腸（はらわた）」は「腹（はら）」の「腸（わた）」であり、明らかに〈腹〉という概念と結びついている。

上に挙げた慣用表現の中で、「腑に落ちる」は本稿のテーマにとって特に重要である。なぜなら、〈腹〉やその内臓の概念と結びついた〈理解〉は、すでに見てきた〈頭〉と結びついた〈理解〉を超えるものとして捉えられているからである。後者が社会的未成熟さにつながる知的な理解であるのに対し、前者は他人の意見や行動に対する共感を伴う深い理解、あるいは解くべき謎に対する一点の疑念も残さぬ完全な理解である。

(39)　頭で理解することではなく、腹に落ちて納得することが行動を支配するのです。
http://www.melma.com/mag/09/m00060009/a00000022.html

(40)　死刑囚の家族が死刑反対を訴える。これは心情的にわかりやすい。でも、殺された側の家族が死刑制度廃止を訴える。こちらはなかなか腑に落ちにくいものがあります。　http://www.isseki.com/stage/kimyo/sub2.html

いわば真の理解とも言うべき深い理解の概念がこのように腹の内臓概念と結びつく背景として、日本語慣用表現に広く見られる「消化メタファー」の存在を考える必要がある。本稿で言う「消化メタファー」とは、［歯牙、口腔、咽喉、胃腸などが参与する食

物摂取および消化に関わる一連の行為のどれかによって、食物摂取・消化とは異なる意味を表す比喩表現］である。その主な例を挙げるなら、次のようになる。

消化メタファー：

［理解］：噛み砕いて話す・噛んで含めるように話す、歯が立たない、鵜呑みにする、呑み込みが早い、呑み込みが悪い、早呑み込みする、咀嚼する、消化する、腑に落ちる、腹に落ちる

［発話行為］：（言葉を）吐く・吐き出す・吐き捨てる、（言いかけた）言葉を飲み込む

［態度・性格］：人を食った話、食えない男、相手を呑んでかかる、出された条件を呑む

このうちロシア語で対応するものを探すなら、せいぜい以下の三つぐらいしかない。Разжевать и в рот положить（噛み砕いて（相手の）口の中に入れてあげる）、переварить（消化する）、я его не перевариваю（私は彼を消化できない）という表現である。最後の語句は、「好きになれない」という意味である。

上の分類を見ると、消化メタファーのうちでも〈理解〉に関するものが際立って多い。このメタファーによれば、〈理解〉とは、食物を噛み砕くかまたは丸飲みにして口中に取り込み、食道を通って腹の中へ送り込み、そこで消化することである。腹という身体部位あるいはその内臓は、理解の対象である食物の到着地点であり、深い理解の概念が〈腹〉と結びつくのはごく自然なことと言える。

こうした消化メタファーの広がりは、日本語の概念体系の顕著な傾向、すなわち精神作用までも含めた多様な事象を、食物摂取・消化という基本的な生の営みの概念によって捉えようとする傾向を示すものである。この傾向は身体概念の精神領域への拡大を示すものと言える。

2.4.2　肉体を超える身体概念

先にも触れたように、これまでは記述の必要上「身体」を二元論的区別に立つ概念を表す用語として、つまり物理的身体を指すものとして扱ってきた。しかし日本語の身体概念は二元論では捉えきれない。そこで本章のまとめとして、日本語概念体系における身体概念を考えてみたい。

この問題を考えるために、ここで改めて〈頭〉を超えるものという視点に戻ってみよう。次の例では、「心」という語が「頭」の対立物として現れている。日本語の「心」が表すのは、思考、記憶、感情、知能など広い範囲に渡る精神作用の総体またはその一部であり、その概念〈心〉はもっぱら精神領域に属している。

(41)　先のことより、今を大事に生きていかなければと、頭ではわかっていても心が

ついていかず、どうやら精神までおかしくなってしまったようです。

http://treasure.ingnet.or.jp/medical/messages/2398.html

(42) 頭では分かっていても心がそれを許さない。

http://urawa.cool.ne.jp/zr7/writing/rititokannjou.htm

ところが次の例では、「身体・体」が「頭」と対比されている（「からだ・体・躰・身体」といった表記の違いはここでは問題ではない）。

(43) 身体で考えるというのは、頭で考えるのとは違う。頭で考えるのは言葉や記号で抽象的に考えることだが、身体で考えるというのは具体的なイメ_ジで考えることである。 http://www.asahi-net.or.jp/~NG1F-iST/body.html

(44) この真の興味は「頭で分かる」ことではありません。実際に自分が行動してきて、自分でもできるという実感からの意味も込められた「身体全体で分かる」ことなのです。 http://www.shukatsu.jp/hakal/spindle/page3.html

(45) 不安や恐怖を感じるのは頭ではなく体である。体からの言葉（感覚）をないがしろにするのは、体を否定して頭で生きようとすることであり、それを続けていくと 一応はかない一時的な平和は訪れても、体は納得しないので、不安、恐怖を生産し続けることになる。

http://village/infoweb.ne.jp/~fwhd7909/cgi-bin/g_book/g_b_kiri103/htm

ここでは「身体・体」は、「実感」、「不安」、「恐怖」という感情・感覚の経験主体であり、また「考える」主体となっている。「からだ・体・躰・身体」の表す概念〈身体〉が感情や思考の主体であるなら、その概念と「心」の表す概念〈心〉との間にはもはや明確な区別が存在しないと言わなければならない。実際、次の例が示すように、〈心〉と〈身体〉とは〈頭〉と対立するものとしてしばしば一つのカテゴリーにまとめられる。

(46) 頭ではわかっているのです。いつ、彼女の心と体は、それを感じるのでしょうか。 http://www4.gateway.ne.jp/~kazumixx/steiner-8.htm

(47) 「決断が一番早かったから」／「けつだん？」／「そう.....、頭で決めたことを、躰と心が、はいそうですって思うことよ」

（森博嗣『地球儀のスライス』、講談社文庫、161）

もっぱら精神領域に属する概念〈心〉と「からだ・体・躰・身体」の表す概念とは、「心身ともに健康」、「体は健康だが心は病んでいる」などの表現が示すように、あるレベルでは対立するものである。しかしまた後者がその対立を超え、物理的な身体の領域と精神領域とをともに含むような別のレベルが日本語にはあるということを上の事実は示している。レベルの異なるこの二つの概念を、ここで便宜上〈身体〉レベル1と〈身体〉レベル2と呼ぶならば、〈身体〉レベル1は心身を明確に区別するキリスト教的二元論と共通する身体概念であり、〈身体〉レベル2は精神領域をも包含する非二元論的な身

体概念である。前者は後者に包含され、後者の一側面をなす。

この日本語の身体概念、〈身体〉レベル2は、〈頭〉と対比される場合に限らず、さまざまな場面で活性化される。それは例えば次のような表現に現れる。

(48) 制御できない怒りが、からだの奥からしんしんと湧いて出た。

（柴田よしき『象牙色の眠り』、文春文庫、111）

(49) 隆史。仇をとってやるぞ……。／その言葉が頭の中で爆発し、宮津はふと我に返った。そして自身の体深くに生じた憎悪の凄まじさに、恐怖した。

（福井晴敏『亡国のイージス』上、58）

感情や良心が〈身体〉に生じるものであるなら、このような心身を融合した〈身体〉はまさしく個人そのものである。そこで上の例は、個人そのものを表す「あたし」や「自分」の生起する次の例との平行性を示している。

(50) だがあたしの中に生まれて育ちつつあるこの虚無感は、もはや自分でもコントロール出来ないほど大きなものになってしまっている。

（柴田よしき『象牙色の眠り』、文春文庫、45）

(51) お前たちは子犬を殺したんじゃない。自分の中にある良心と感情、そこから滲み出る弱さを殺して食ったんだ。　（福井晴敏『亡国のイージス』上、322）

本章で取り上げてきた身体部位語を含む精神的な意味の慣用表現が、身体性（ここではレベル1）を顕著に示すという事実は、このような日本語の身体概念の反映である。日本語概念体系においては〈身体〉は、その一側面である物理的な意味での身体性を脱却することなく、そのままで精神性を帯びるのである。ここでは記述の目的で、日本語の身体概念を〈身体〉レベル1と〈身体〉レベル2とに分けているが、通常の言語使用において二つのレベルは特に意識されることもなく、一つの概念〈身体〉に統合されている。〈身体〉とはそのようなものであることを、日本語母語話者は当然のこととして受け入れているからである。

3. 結論

本稿では、精神の知的側面としての〈頭〉を出発点として、ロシア語および日本語の概念体系における身体と精神の関係について考察してきた。ここで簡単に振り返ってみよう。

まず、〈頭〉と голова（頭）は、どちらも精神の知的側面と結びつくという点で共通している。しかし、ロシア語では голова（頭）と結びつく知的側面は社会生活上の良識的判断力、分別として捉えられ、それ自体としては肯定的価値を付与されているのに対して、日本語ではそれはむしろ社会生活での経験を欠いた知識や理論あるいは非現実的

な理念や理想として捉えられており、したがって社会生活という視点からは否定的な価値を帯びることになる。

社会生活という視点からはあくまで肯定的価値を持つ голова（頭）は、にもかかわらずロシア語の価値体系全体の中では最上位に位置するわけではない。それを超えるものは感情的な側面と結びつく сердце（心臓）である。つまりロシア語では、知的、合理的精神よりも感情の方がより高い価値を与えられている。сердце（心臓）は、身体概念に由来しているとはいえ、ほとんど身体性を失っており、それ自体が感情の経験主体、さらには行為主体として他者に働きかけることもできる。またそれは、透明で清らかなもの、本質的に善なるものという特徴を持つ。社会的な分別よりも透明で清らかな感情を重要視しているということは、ロシア語話者が「現実」よりも「理想」に価値を置いていることを示している。このことは、ロシア語の概念体系における душа（魂）の優位性によっても裏つけられる。

それ自体も透明で善なるものであるロシア語の сердце（心臓）を、さらに超える高い価値を持つのは душа（魂）である。душа（魂）はそもそも身体性を全く持たない概念である。しかし同時に сердце（心臓）とも重なり合い、両者はレベルの異なるヴァリアントをなしている。つまり сердце（心臓）から душа（魂）へは連続的につながっている。そして душа（魂）は、сердце（心臓）よりも高尚な精神作用と結びついている。それは社会的存在としての個人の世俗的な精神ではなく、普遍的な人間存在に付与されているとされる深い理解や愛、信仰と結びつく。このようにロシア語では、社会生活上の知恵や判断から出発して感情、道徳へと進み、そこからさらに高尚なもの、理想的なものへと向かう理想主義的傾向が顕著である。ロシア人のこの理想主義的傾向は、生活にかける費用を犠牲にしても、宇宙開発や芸術などの非実用的なものに莫大な費用をかける政策を国民が長い間支持してきたという歴史的事実にも現れている。

一方、日本語の概念体系にはロシア語のような「現実」と「理想」の対立や理想主義的傾向は見られない。日本語においても、〈頭〉を超えるのは、感情と深く結びついている〈胸〉である。ただし、ロシア語の сердце（心臓）と違って、日本語の〈胸〉は感情だけでなく思考とも結びついており、日本語の概念体系において感情と思考との間にロシア語のようなはっきりした線は引けない。さらにロシア語と異なるのは、〈腹〉もまた〈胸〉と同じように思考や感情と結びついていることである。しかも日本語の〈胸〉および〈腹〉の概念は身体としての特徴を強く残しており、この点でもロシア語の сердце（心臓）と大きく異なっている。それは、〈胸〉や〈腹〉が外界に働きかける自立した主体としては捉えられず、外界からの刺激に対する反応としての感情が生じる場として、またはせいぜい経験主体の一部として捉えられているという受動性に現れている。またその身体性は、〈胸〉、〈腹〉の閉鎖性、不透明性、個人性という特徴にも現れてい

る。

日本語において〈胸〉よりさらに重要な概念は〈腹〉である。〈腹〉は、〈覚悟〉や〈決断〉、〈本音〉という個人の人格にとって決定的に重要な諸概念を包括し、いわば個人の人格の核とも言うべきものとして〈胸〉を超える概念である。このように日本語では、頭から出発して、胸へ、さらに腹へと身体胴部を下降し、また腹の内臓へと身体の奥深く潜り込んでいく。〈覚悟〉や〈決断〉は、ある個人が現実的な社会生活の中で生きる（生き残る）ために重要である。したがって、理想に重点を置くロシア語話者とは違って、（少なくとも身体と精神の関係を見る限り）日本語話者は現実的な社会の中の個人のあり方に重点を置いていると言える。

以上をまとめてみよう。英語話者とは違って、ロシア語話者と日本語話者のどちらも精神の知的・合理的側面をそれほど重要視していない。どちらの言語話者にとっても、論理や計算で捉えられない、存在のより深い部分に根ざしているとされるような精神作用の方が重要である。ここまではロシア語と日本語の概念体系はほぼ平行的である。しかし、論理を超えた精神作用の捉え方は両言語で異なっている。精神と身体とを明確に分離し、ひたすら清らかで透明なもの、理想的なものを求めるロシア語と異なり、日本語の概念体系では、身体性の強い、善悪分かちがたく溶け込んだ〈腹〉という不透明で曖昧なものが重んじられている。

ここには日露の次のような違いが反映されている。他のキリスト教文化圏と同様に心身二元論に立つロシア語では、身体と精神が明確に区別され、身体よりも精神に高い価値が与えられている。またこれも二元論的な考え方と関連していることだが、何らかの精神作用と結びつけられるときに、ロシア語の身体概念はその身体性を失い「精神化」される傾向が強い。一方、日本語の概念体系における身体は、必ずしも精神と対立するものではなく、しばしば精神を内包するものであり、したがって身体は自らを脱却することなくそのままで精神領域にまで及ぶ。そのため、身体表現が精神的意味を帯びる時でさえ、ロシア語に比べ身体性を失うことが少ない。この日本語の身体概念は、日本語の概念体系の基底に横たわるある傾向を暗示している。この傾向は、自然界の物体がそのままで一種の精神性を帯びるという意味で、アニミズム的傾向と呼ぶことができる。日本語とアニミズムとの関係についてはさらに詳しい研究の必要があるが、この問題は今後の課題とする。

本稿が明らかにした両言語の概念体系の特徴は、この特徴からあらゆる細部が予測できるというほど決定論的なものではない。始めにも述べたように、一言語を支える概念体系は単純なものではあり得ず、どの視点から見るか、どのようなデータを利用するかによってさまざまな側面を見せると思われる。しかし、日露対照という光を当てることで明確になったこの特徴は、多くの矛盾する諸側面の一つという以上に、それぞれの概

念体系に固有の顕著な特性であると考えられる。

註

1　本稿では「精神」という語を、知的・論理的次元のみならず情動的な次元をも含み、さらには宗教的次元にまでおよぶ人間の内面の作用をすべてカバーするメタ言語として使用する。

2　英語にも「魂」を意味する soul という語がある。しかし、Wierzbicka（1992）が論証しているように、ロシア語と比べれば英語の soul の使用範囲は限られており、英語の概念体系の中での soul の重要性はロシア語の душа（魂）のそれよりもはるかに低い。「魂」の重要性という観点からヨーロッパの言語を一つのスケールに置いてみれば、ロシア語と英語は両極端にあって、フランス語（âme）とドイツ語（Seele）はその間に位置することになる（1992：33）。

3　例文には括弧の中に直訳を書き、その後に大意をそえる。ただし、直訳から大意がわかる場合には、直訳のみにとどめる。

4　ロシア語では「胸」に対応する грудь（胸）もまた感情の座として捉えられることがある。しかし、сердце（心臓）に比べて грудь（胸）は使用範囲が狭く、またアクティブな行為主体として捉えられることもない。そのためここでは取り上げなかった。

引用文献

ウォーフ , B.L.　池上嘉彦訳（2001）『言語・思考・現実』講談社学術文庫

田中聰子（2003）「心としての身体－慣用表現から見た頭・腹・胸」『言語文化論集』第XXIV巻第２号、pp.111-124、名古屋大学言語文化部・国際言語文化研究科

Fillmore, Charles J. 1982 Frame Semantics. The Linguistic Society of Korea (ed.), Linguistics in the Morning Calm, Seoul: Hanshin Publishing Co., pp.111-138

Geertz, Clifford 1979 Meaning and order in Moroccan society: Three essays in cultural analysis. Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, George 1987 Women, Fire, and Dangerous things. Chicago: The University of Chicago Press.（池上嘉彦・河上誓作ほか訳　1993 『認知意味論』大修館書店）

Langacker, R.W. 1987 Foundations of Cognitive Grammar Vol.1. Stanford: Stanford University Press.

Levontina Irina V., Zalizniak Anna A. 2001 Human emotions viewed through the Russian language. In Harkins & Wierzbicka (eds.), Emotions in Crosslinguistic Perspective, Mouton de Gruyter, 291-336

Wierzbicka Anna. 1992 Semantics, culture, and cognition: Universal human concepts in culture-specific configurations. New-York: Oxford University Press.

Wierzbicka Anna. 1997 Understanding Cultures through their Key Words: English, Russian, Polish,

German, Japanese. New York: Oxford University Press.

Вежбицкая Анна 1999 «Семантические универсалии и описание языков» Пер. с англ. А.Д. Шмелева под ред. Т.В. Булыгиной. Москва: Языки русской культуры.

Лотман Ю.М. и Б.А. Успенский 1994 «Роль дуальных моделей в динамике русской культуры (до конца XVII века)» в Б.А. Успенский «Избранные труды» том 1 стр.219-253. Москва: Языки русской культуры.

Шмелев А.Д. 1997a «Лексический состав русского языка как отражение «русской души» в Т.В.Булыгина и А.Д. Шмелев (ред.). «Языковая концептуализация мира (на материале русской грамматики)» стр.481-495.Москва: Языки русской культуры.

Шмелев А.Д. 1997b «Дух, душа и тело в свете данных русского языка» в Т.В.Булыгина и А.Д. Шмелев (ред.). «Языковая концептуализация мира (на материале русской грамматики) » стр.523-539. Москва: Языки русской культуры.